

貞室の貞徳追慕：「貞徳居士十三回忌追福之俳諧十三百韻」を紹介して

雲英，末雄
早稲田大学教授

<https://doi.org/10.15017/4741979>

出版情報：雅俗. 10, pp.2-15, 2003-02-25. 雅俗の会
バージョン：
権利関係：著作権保護のため論文中の図は非表示



貞室の貞徳追慕

雲 英 末 雄

——「貞徳居士十三回忌追福之誹諧十三百韻」を紹介して——

近世初期文壇の中心人物、貞門俳諧の主導者松永貞徳は、承応二年（一六五三）十一月十五日八十三歳で逝去した。貞徳逝去後、いち早く、貞徳が余生を送った五条花咲の宿を中心にその晩年や逝去・葬送のことなどを描いた『貞徳終焉記』を草^律し、追悼の独吟百韻を興行したのは門下の正章（貞室）である。そのうえ正章は、

追悼のため同月下旬には「貞徳老人追善独吟」として千句の大作をなした。更に年末には、

師にも親にも別れ侍りしとしのくれに世中よろづあぢきなかりしかば

わらはきて歎きこり交るとし木哉

貞 室

の句を詠じた（玉海集）。

（小高敏郎『松永貞徳の研究』至文堂、昭和28年）のである。さらに翌承応三年になると、歳旦三つ物の発句に、

いにし年長頭丸（貞徳）より誹諧の道

ゆづりはの名をうけし事

人氣なき身のかざりわらとも

おもひなし侍る心を

接とめてけふぞめいばく花の春

正 章

と詠んで貞徳の後継者であることが事実であるかのごとく誌し、翌承応四年の歳旦三つ物では貞徳の一字をとって貞室と名乗り、「年徳や佐保姫君の産のかみ」の発句を詠んでいる。貞徳の跡目を継承して花の本二世と貞室が称したことには、貞徳門人の間から異議が出されるこ

とになるのだが、貞室はそれらの異議には耳をかさず、かなり強引に花の本二世として行動してゆく。

貞室編の『玉海集』は明暦二年（一六五六）八月に刊行され、令徳編の『崑山集』に匹敵する一大撰集だが、ここでも貞室やその門下の人々による貞徳の百ヶ日や一周忌や三周忌の様子が発句の詞書などに示されている。それらを示してみよう。

先師死去百ヶ日の追善に

飲食の百味にめぐる春日かな

貞室

これは、百ヶ日追善だから、貞徳逝去の承応二年の翌三年二月下旬のことになり、恐らく右の貞室の発句で連句が興行されたものと思われる。

先師一周忌の追善に

数とるや弟子等は数珠の玉霰

貞室

これは同じく承応三年十一月十五日の興行の発句であろう。百ヶ日同様貞室を中心として門下の人々によって追善の連句が興行されたものと思われるが、百ヶ日追善同様連衆の具体的な俳人の名はわかっていない。あるいは独吟の可能性もあろう。

先師三回忌

雪になく溝三歳やわがなみだ

貞室

貞徳居士三回忌に貞室亭にて

雪とふりし跡とふ友や三回忌

河地又兵衛

正量

長頭丸第三回忌に

霜月日たてるはほどもなみだかな

摂州大坂梶山氏

保友

重頼門で大坂初期俳壇の古老保友の発句は、おそらく彼自身が大坂の自亭で連句興行して詠んだものであろう。

貞室亭でのものと考ええるのには躊躇するものがある。それに対して貞室の発句や、正量の発句は明らかに貞室亭での追善興行の折のものである。正量こと河地又兵衛は京の人、母利司朗氏の「新出安原貞室書簡考」（『東海近世』10、平成11年5月）によれば、妙法院家司で貴顕への出入りが可能な人物だったという。俳諧では、『歳旦発句集』承応二年の箇所「九重や天気よろしき御代の春 正量」の歳旦吟が入集し、ついで『知足書留歳旦帖』承応三年にも歳旦吟が入集。明暦二年の『玉海集』では発句三が入集する。以後明暦三年の貞室の歳旦三つ物の引付に一句入集。また寛文五年（一六六五）の「貞

徳居士十三回忌追福之誹諧三百韻」に一座し（後述）、

寛文七年の『玉海集追加』に発句五、付句二が入集し、

さらに寛文十二年の『続境海草』に発句が一列入集する。

貞室一門の古くからの門人といつてよからう。

ともあれ貞徳の三回忌が貞室亭で行なわれ、追善俳諧興行が貞室やその門人たちによつて挙行されたことは事実であるが、どの程度の人々が集まり、どの程度の俳諧が行われたのかは、今のところ不明である。

さきに引用した小高敏郎氏『松永貞徳の研究』には、第九章最晩年の第三節年忌に、一周忌から二百回忌に至るまでの漢詩畑の人々の詩、和歌や俳諧、狂歌の門人の人々の作品が概述されているが、貞室については三回忌までのものが収められているが、以後の追善俳諧興行のことはまったく触れられていない。貞徳逝去後きわめて熱心にその追善事業を行なってきた貞室が、その後の貞徳の年忌に何らかの行動を起こさなはずはない。以下管見に入つた七回忌と十三回忌の俳諧興行に触れてみたい。

七回忌

万治二年（一六五九）が貞徳七回忌にあたる。寛文七年刊の貞室編『玉海集追加』は、『玉海集』以後の貞室一門を結集させた発句二千百六十三、付句七百九十八を収録した一大撰集だが、そこに貞徳七回忌の詞書のある句が数列入集している。『玉海集追加』冬之部に、

霜月十五日先師七回忌七百

韻興行して

霜月のもちも三世のちぎりかな

貞室

貞徳居士七回忌冬懷

ふるき世やしのびかへしの竹の雪

藤本氏
素仙

先師七回忌に

わすれめや雪とふりにししちねんき

貞室

貞徳居士七回忌七百韻興行

せしに

埋火をとりて居士とふ香爐かな

貞室

また『玉海集追加』付句中に、

貞徳追善七百韻のうち

倫旨いたゞく僧はものしり

てくるまをしはしかしこにとゞめさせ

たびくくねるどん太郎どの

貞室

とある。貞室の句の詞書によって、貞徳七回忌には、七百韻が門下の人々と興行されたことが判明する。貞室の発句はそのうちの三句であると思われるが、他の発句四句のうち素仙のものは、そのうちの一句であろう。素仙については、『玉海集追加』にはこの一句しか入集しておらず、他に万治三年の重頼編『懷子』に発句三、付句四が入集するのみで、京都の人ということの他は伝未詳。おそらく貞室に何らかの縁があつて発句を詠んだのであろう。

十三回忌

寛文五年が貞徳十三回忌にあたる。この十三回忌については、近時貞室自筆の「貞徳居士十三回忌追福之誹諧三百韻」の一軸が出現し、幸いに架蔵に帰することができた。その一軸は本紙の大きさは縦一八・六糎、横一一三・五糎で、現在は軸装になっている。以下に全文を翻字をして、解説を加えてゆきたい。

寛文第五乙巳曆霜月十五日先師

貞徳居士十三回忌追福之誹諧

三百韻於貞室亭執行

脇第三
当座

第一

雪に侘の斎や一汁三さい忌

茶たうをたつる霜月の望

底寒き井戸の水くみ華摘て

第二

よむ経声も冴る陀羅尼や勇施井

行者の袖は白妙の霜

岩橋のうへ下くだり月すみて

第三

雪花やふるきをおもふ手向草

氷おしわりそ、ぐ閑伽桶

明星のちろめく影に起なれて

第四

法の花やふる摩訶まだら衾雪

鶯はさながら極楽の鳥

池広み管絃の御舟さしつれて

貞室

正信

可頼

正信

可頼

祐上

可頼

正信

貞室

祐上

貞室

善人

著作権保護のため図は非表示

第五

門葉はかれぬ霜月の作善哉

跡ほどさゆる称名の声

盤渉に吹ぬる楽もつい果て

第六

啼くも遠きを追や友千鳥

河風さむみさそふ伽羅の香

谷の戸の雪は御簾まさあげて

第七

茶の花にひがしや悼む今朝の霜

隠居の園は冬の山陰

薬湯にとる谷水のいてとけて

第八

霜に煙る焼香箱もついしゆ哉

つくえのうへの檣寒菊

伏兎いるて児や篱に捨つらん

第九

影もうつれよむ八軸のひもかゞみ

芭蕉のかぶを埋む雪霜

唐門の脇に築山つきあげて

第十

みち布か営む法の場の霜

楽のひゞきも寒る朝風

玉はしに日影てらくうつり来て

第十一

声さゆる頻伽のかいか空の月

ふれるあられや瓊瑤の玉

耳の輪を過る朝風袖に落て

第十二

もとよりも爐につぐ炭やをき合せ

権輿なかりし今朝の残雪

取あへず鷹野の供奉に出せて

第十三

骨をまもる魄はいづちへ雪の下

寒き林にをやむから風

散かゝる木葉の道を掃除して

追加

霜月のもちやきえにし丸の影

善入

定利

長之

正寿

善入

正寿

貞室

正的

可頼

長之

重次

貞室

正信

著英

霰の後の菩提樹の露

可頼

仏手柑の枝の朝風しづかにて

貞室

右凌老眼殊更及夜陰

令書写忌早 外聞尤憚

おほし 空賢 一養

はじめに貞室亭でこの貞徳の十三回忌追福之誹諧は興行されたが、その住所は京都のどこであろうか。母利志朗氏は貞室の屋号が「鑑屋」で紙商といわれているところから、元禄五年（一六九二）、刊『諸国万買物調宝記』の「紙屋」の項に「三条通埋忠町 かぎや」とある店をつきとめ、これが貞室の家であろうと推定された（『俳文学大辞典』「貞室」の項目）。ここからだ貞徳の三条衣棚は近く、年少の頃から貞室が貞徳の私塾へ通ったことも肯定できよう。西武も同じ町内の綿商人の子であったというから互いに幼馴染であったものと思われる。

第一の百韻は十三回忌を「一汁三菜」に掛けた発句で始まるが、『玉海集追加』冬之部には、

先師十三回のいとなみに

千三百韻興行し侍りて

雪に侘の斎や一汁三さい忌

貞室

とある。ともかくこの発句を巻頭にして貞徳追福の千三百韻が開始されてゆくのである。脇は正信が付けている。また第三は可頼が付けている。この兩人は貞室の門弟として重きをなす人物である。「脇、第三、当座」とあり、脇、第三はあらかじめ用意されたものでなく、即興でその場で付けられたと思われるが、正信、可頼とつづくのが自然に定まっていたのであろう。

正信は、寛文三年の『五条之百句』に「貞室門弟 可頼」が「此仁今に室門へ出入して此道をはげます。貞徳在世の内にも切二徳門へ室と伴出て、会にも逢し人なり。器用たり。句体も徳・室の風義にたがはず、作もつよし」と評される、そのすぐつぎに「室門弟 正信」として「右におなじに今室門に遊びて其流を学、貞徳へも出入せし人也。器用は可頼におとれり。とかくすき人なり」と評されている。『知足齋留歳旦帖』の承応三年に「縫屋 正信」として「ことの葉の種や生る今朝の春」の歳旦吟が入集し、明暦三年以降貞室・可頼・政信（正信と政信の両様が用いられている）で、歳旦三つ物を組み、万治

を経て寛文五年まで同じメンバーで歳旦三つ物を興行している。寛文六年にいたり、メンバーのうち正信にかわって長之が加わっているの、あるいは寛文五年の年内に逝去したのかも知れない。『玉海集』では正信は樋口長左衛門として二句入集するが、これは貞室と歳旦三つ物のメンバーの正信ではあるまい。むしろ発句十五、付句十入集の政信こと府類屋茂兵衛の可能性が高い。縫屋正信と、府類屋政信が同一人かどうか、今のところ判断に困しむが、『玉海集』で青地市郎右衛門の可頼が発句十二、付句二十四の入集なので、府類屋茂兵衛政信を正信と同一人に認定したいと思う。ちなみに政信（正信）は承応二年一月に興行された『紅梅千句』では、貞徳・友仙・貞室・季吟・安静・可頼とともに連衆の末席に加わっている。貞室の古くからのもつとも忠実な門弟といっているだろう。

可頼は、北村季吟や荻野安静が貞室から離反していったのに対して、正信と同じく師に忠実に従った門人である。先にも引用したが『五条之百句』では、「器用たり。句体も徳室の風義にたがはず、作もつよし」と絶賛して

いる。また『誹家大系図』では、貞徳門として「青地氏、通称、市郎右エ門。京師ノ人ナリ。貞室ト親ム事深シ」とある。『知足書留歳旦帳』の承応三年に「青地一良右エ門 可頼」として「年に立霞の色や黒の駒」の歳旦吟が入集し、明暦三年以降は貞室・可頼・正信で歳旦三つ物を組み、以後寛文五年まで同じメンバーで歳旦三つ物を興行。可頼はその後貞室のもとで寛文六年も歳旦三つ物のメンバーとして残り、『歳旦発句集』には寛文七年・同八年まで歳旦句が収録されている。それ以後の歳旦句は採録されていないので、あるいはこのころ俳諧活動を止めたか、逝去したと思われる。発句は延宝三年（一六七五）の『糸屑集』に二句入集し、同四年の『古今誹諧師手鑑』にも「賑ふや菖蒲のほりに町くだり 可頼」の短冊が模刻されている。発句の初出は慶安元年（一六四八）季吟編『山之井』に五句入集し、以後明暦二年『玉海集』では発句十二、付句二十四、万治三年季吟編『新続犬筑波集』では発句二十六、寛文七年の『玉海集追加』では発句二十八、付句五十五が入集する。その他の撰集にも発句が散見する。俳諧作者としてはまずまず活躍し

た人物といえよう。

法の花や降まかまだら衾雪

伊東氏
祐上

第二の第三を詠じた祐上について考えよう。祐上は京の人。伊東氏。寛文七年の『玉海集追加』に「黎民や憐愍でたつ御代の春

伊東氏
祐上

以下発句二十八句が入集する。

それゆえ寛文期から貞室の門下に加わったものと考えられる。寛文九年の貞室の歳旦三つ物では、貞室・祐上・了味の三名で三つ物が興行され、同じく十年にも同じメンバーで三つ物が興行されるが（寛文前後古俳諧）、寛文十三年のものにはメンバーに入っていない。また『歳旦発句集』の寛文九年の項には「賢聖や肩ならべ出ん御代の春 祐上」、同十年には「よろこぶや又此春と向ひ腹 祐上」の歳旦句が入集するが、この二句は前出の歳旦三つ物の発句である。祐上に関しては以上の他、手がかりはない。

第三の発句は、『玉海集追加』冬之部では、

貞徳老人十三回忌に

雪花やふるきをおもふ手向草

青地氏
可頼

として入集し、同じく第四の発句も同集に、

先師十三回忌に

として入集する。つぎに第四の第三を付けている善入について述べてみよう。

善入は、『誹家大系図』に貞室門として「山本氏。通称善兵衛。京師東洞院ノ人。（下略）」とあり、『歳旦発句集』の承応三年に「年徳の神もらいある試筆哉 善入」として歳旦吟が入集。『知足書留歳旦帖』の明暦三年に正寿・善入・貞室、善入・正寿・貞室で歳旦三つ物を興行している。俳諧撰集『玉海集』に「とし徳のかみもらいある試筆哉 山本善兵衛 善入」以下十三句が入集。また万治三年二月二十五日の貞室発句の「壬生天神社奉納百韻」に、正信。可頼・悔焉・宗隆・玄伯・恵佐・祐孝・正寿・元春らと一座。寛文期には『伊勢正直集』や『小町踊』

『天和順礼』等に入集し、『玉海集追加』には発句十九、付句九が入集する。貞室の古くからの門人といえるだろう。

第五の発句は、『玉海集追加』冬之部では、

貞徳居士十三回忌貞室興行に

門葉はかれぬ霜月の作善かな

河池氏
正量

とある。正量については、貞徳の三回忌の時にも貞室亭

で発句を詠んでおり、すでに述べたので省略する。

第六の発句を詠んでいる悔焉について述べよう。悔焉は高野山や京の智積院に出入した僧で、悉曇学に精通し、かつ木筆を能くした学僧である。奇狂な行動が多く、俳諧では貞室門。『玉海集』では発句一が入集し、『玉海集追加』では発句十四、付句十五が入集する。とくに『玉海集追加』夏之部巻頭の「かへば死なん虱かはゆし古ごろも 桑門知等庵主 悔焉」の作によって「虱の悔焉」として評判をとった。詳しくは加藤定彦氏「虱の悔焉——瘋癲学僧の生涯」（『俳諧の近世史』若草書房、平成10年）を参照されたい。ともあれ悔焉は貞室門の中でもとりわけ異色の存在であった。

第六の脇、第七の発句を詠んでいる光俊については、ほとんど略歴は把握できない。『玉海集追加』に「不老山にすませ給ふや若ゑびす 光俊」以下発句五、付句一が入集するが、住所は不明、恐らく京であろう。光俊は同名異人が多く、『時勢粧』『佐夜中山集』では山口光俊、『誹諧捨舟』では藤井光俊、『天神奉納集』では金丸光俊、『芦花集』では副田光俊がいる。現在のところ特定する

ことはできない。

第七の第三を詠んでいる正的については、まったく手がかりがない。

第八の発句は、『玉海集追加』冬之部では、

貞徳翁十三年忌に

霜けぶる焼香ばこも追修かな

長之

とあつて上の句に少しの異同がある。長之は『誹家大系図』の宮川松堅の箇所に「長之」として「宮川氏。通称、三郎右衛門。松堅兄歿」とある。寛永十九年（一六四二）の『鷹筑波』に「石竹にとまる蛩やいし灯籠 宮川三郎右衛門 長之」として発句一入集。『玉海集』では十三句、『玉海集追加』

では、発句五十三、付句九が入集し、寛文十一年の『難波草』では発句一が入集する。『知足書留歳旦帖』などに

よれば、寛文六年、七年、八年と貞室・長之・可頼で歳旦三つ物を興行し、寛文九年には『歳旦発句集』に「あら玉やふくみて来つる酉の年 長之入道 了味」とあり、了味

と改号、貞室・祐上・了味で歳旦三つ物を寛文九年十年と行なっている（寛文前後古誹諧）。さらに寛文十一年には貞室・喜雲・了味で歳旦三つ物興行。同十三年には

貞室・重次・了味で歳旦三つ物を興行している。この寛文十三年に貞室は逝去するのだが、了味は延宝二年（一六七四）にも歳旦発句を詠じており、その後も活躍したと思われる。

第九の発句は、『玉海集追加』では付句上の箇所、

貞徳遠忌に

影もうつれよむ八軸のひもかゞみ

芭蕉のかぶをうづむ雪霜

貞室

とある。発句を詠んだ正寿は、『鷹筑波』に「五月雨の空は毎日子の日哉」野々口庄兵衛以下三句が入集する野々

正寿

口庄兵衛のことであろう。以下『玉海集』では発句一、

『砂金袋』では発句八、『玉海集追加』では発句五が入集する。また万治三年二月壬生天神奉納百韻には、貞室以下諸氏と一座している。また歳旦三つ物では、『知足曹留歳旦帖』明暦三年の箇所正寿・善入・貞室による歳旦三つ物が誌されている。

第十の発句を詠んでいる定利は、慶安四年の『崑山集』に「おどる程みときは遊行柳哉」敦賀野瀬平兵衛以下六

定利

句が入集する定利であろう。『玉海集』には敦賀野沢

（野瀬）氏定利として発句四、付句三が入集し、『玉海集追加』では発句十八、付句二十が入集する。敦賀からこの追善俳諧興行のために上京したものであろう。

第十三の発句は、『玉海集追加』冬之部には、

貞徳居士十三回忌貞室千

三百句興行に

骨を守る魄はいづちへ雪の下

犬井

重次

とある。この重次はのちに貞室の跡目をついで一囊軒貞恕を名乗る人物で、もともと越前敦賀の出身である。『誹家大系図』には、貞室の門人として「貞恕 犬井氏。俗称ハ治郎兵衛、名、重次。薙髪シテ貞恕ト改メ一囊軒ト号ス。四条東洞院ニ住ス。本土ハ越前敦賀ノ人ナリ。万治ノ頃歿江州大津に寓居ス。一年」いまだ遠くはのびじ落人トイヘルニ「道はたにいきりこそたて馬糞ト云句付テヨリ、大津ノ馬糞トイフ名ヲ得タリ。室叟病テ死セントスルニ及デ、恕ヲ以テ花ノ本正伝三世トス。家書蠅打貞室千句批言、茶杓竹返答、阿太知千句、新玉海集等アリ。元禄十五年壬午三月四日没、行年七十歳。（下略）」とある。没年齢は、母利司朗説（『俳文学大辞典』「貞恕」の項目）により八

十三歳とすべきであろう。貞室生前中は重次の号を用い、

『崑山集』に「つかりては風もぬる、や川柳」敦賀犬井二 郎兵衛 **重次**

以下発句七句入集。『玉海集』には同じく敦賀で発句十

入集。『玉海集追加』では発句五十三、付句四十四が入

集し、貞室門の中で重視されていたことがわかる。なお

『玉海集追加』で重次は、地方在住者のごとく地名は示

されず単に「犬井氏重次」とあるところから、すでに寛

文初年には上京していたものと考えられる。この十三回

忌の折も京在住と考えたい。のち寛文十三年には貞室・

重次・了味と歳旦三つ物を興行。その年二月七日貞室が

逝去すると、剃髪して貞恕と改名し、跡目を継承してい

る。

追加の発句は、『玉海集追加』付句上に、

貞徳居士十三回忌に

霜月のもちやきえにし丸の影

あられの後の菩提樹の露

とある。発句を詠んだ著英は丹波福知山の人で、『玉海集

追加』には「酔ていはふ酒や麴の花のはる」丹波福知住 横山 著英

以下発句二十三、付句六が入集する。その他『続山井』

に発句三、『俳諧鳥合』に発句二、『俳諧法農華』に発句

十四が入集する。『玉海集追加』では、丹波福知山住と

して吉久・久重・見藤・重広・正通らの俳人が入集する

が、著英の入句数が群を抜いて多く、著英はこの地の貞

室門の有力俳人といえるであろう。

以上、貞徳十三回忌俳諧興行の貞室亭に集まったメン

バーの略歴を述べてみた。簡単にまとめると、このうち

明暦二年の『玉海集』あたりですでに門下になっている

のは、正信・可頼・善入・正量・悔焉・長之・正寿・定

利・重次と大部分を占める。それ以後寛文七年の『玉海

集追加』あたりに活躍が知られるようになるのは、祐上・

光俊・著英である。正信は未詳。前者のうち正信と可頼

とは、貞室と明暦三年以降万治を経て寛文五年まで毎年

歳旦三つ物を興行しており、気心のしれた門人である。

正量や悔焉らの存在も貴重で、妙法院家司正量は御所方

への交流に便利だし、悔焉のごとく能筆で著名な学僧、

しかも奇行の持ち主であれば何かと評判になり、貞室の

俳諧活動にとつても決してマイナスにはならなかっただ

ろう。また宮川松堅の兄と思われる長之の存在も、貞室

には力づよい味方となつたであらう。それに、のちに貞室の跡目をつぐことになる重次の出座は磐石の重みがあつたであらう。なおまた、越前敦賀の定利の出座は、地方への視野を拡げる意味で意義あることであつたらう。後者の俳人は、これからの貞室門になつてゆく上で重要であることはいふまでもないが、ここでも地方から丹波福知山の著英が出座しているのは注目すべきことであらう。

貞室は、貞徳逝去後ただちに自らの跡目を正統化し、俳壇での主導権や影響力を獲得するために、『貞徳終焉記』の執筆と追善独吟百韻の興行、さらに百ヶ日忌、一周忌、三回忌、七回忌と回忌を重ね、十三回忌まで貞徳追慕の連句興行を行なつてきた。その十三回忌の興行は、まさに一つのピークをなしたものと思われる。貞室一門の古参や中堅あるいは新人らが結束して、しかも京に在住のものだけでなく越前敦賀や丹波福知山の俳人まで参加しているのである。そうした千三百韻の興行は、一大行事として世間の注目を集めたことであらう。このように貞徳追慕の名目で、年忌ごとに追善連句興行を行なつ

たのは、貞徳の多くの門人のなかでも貞室ただ一人だけといつてもよく、その行動は一門の結束はもとより、さらなる自派の拡充へとつながつていったと思われる。それらの成果は二年後の寛文七年の俳諧撰集『玉海集追加』中本七冊に如実に投影されているといつてよからう。なお、以後の貞室興行の貞徳追慕の記録は管見にはおよばない。なおまた蛇足ながら、貞徳十三回忌の追善興行は、山深い伊賀上野の地でも藤堂蟬吟公の発句によつてとり行なわれた。

貞徳翁十三回忌追善俳諧

野は雪にかるれどかれぬ紫苑哉

蟬吟公

季吟の脇、以下正好・一笑・一以・宗房による六吟百韻がそれである。これが松尾宗房（芭蕉）の俳諧におけるスタートを示すものになつたのは、俳諧史上注目すべきことであらう。またこの百韻の巻末には「右、此俳諧、季吟叟より鳥羽里実相寺江納置候者也。寛文五年霜月十三日」とある。これも注目すべき事実であらう。

注

1 塩崎俊彦氏は「貞徳自筆『貞徳終焉記』について——前田濤園旧蔵本をめぐって——」（『連歌俳諧研究』98、平成12年2月）において、近年再発見された『貞徳翁并百韻』（乾憲雄編、夢望庵文庫、平成11年）の内容を紹介し、「終焉」の語義から『貞徳終焉記』を読み直す必要を提言されている。

○ 本稿を成すにあたり、未刊の稿本松澤正樹編『貞門談林俳人大観』俳名索引』から多大な御学恩を得た。記して御礼申し上げます。